

令和5年度第1回相馬市総合教育会議議事録

1 開催日時

令和6年2月8日（木）

開会 午前10時00分

閉会 午前10時45分

2 開催場所

相馬市役所 3階 庁議室

3 出席した構成員

相馬市長	立谷秀清
教育長	福地憲司
職務代理者	宗形明子
教育委員	菅野明彦
教育委員	関根進
教育委員	森陽子

4 欠席した構成員

なし

5 事務局関係

（相馬市）

企画政策部長	佐藤芳男
企画政策課長	落合武志
企画政策係長	森洋人

（相馬市教育委員会）

教育部長	横山英彦
生涯学習部長	高橋利宗
総務課長	中塚記章
学校教育課長	目黒信浩
生涯学習課長	但野拓也

6 傍聴人

なし

7 協議事項

- （1）リーディングスキルテスト（RST）と全国学力・学習状況調査について
- （2）相馬市史編さん事業について
- （3）その他

8 議事の経過

- 1 開 会（企画政策課長）
- 2 市長あいさつ
- 3 教育長あいさつ
- 4 協 議

(1) リーディングスキルテスト（R S T）と全国学力・学習状況調査について

●協議結果

R S T事業は、読解力向上を通じて子どもたちの人生を豊かに、強くすることを第一の目的に据え、さらには学力向上の効果も現れてきていることから、今後も主要な財源である教育復興子育て基金の有効活用を図りながら、将来にわたって長期的に継続していく。

●協議内容

横山英彦教育部長 （別紙資料により説明）

菅野明彦委員 R S Tについて、取り組んで3年目になりますが、大切なのはそれがうまく授業に現れて、子供たちに伝わるといったことだと思います。先生方も、もちろん理解はしているのでしょうけれども、いろいろな授業を見ているのですが、十分に理解されていないと思われる先生もいるのは確かです。その辺のところを、先生方がもうちょっと理解できるよう取り組んでもらいたいと考えています。

森陽子委員 学校でこのような取り組みをして授業を行っているのを、家庭でサポートするというのはすごく難しい部分だと思っています。「R Sノート」のようなものを活用して明確な家庭学習の仕方を先生がしっかり示していただき、家庭学習をサポートするところまで実施するのが大事なのかなと思います。

宗形明子委員 先生方が変わってきているとすごく思います。とても素晴らしい先生もおり、先生の中でも個人差はあるかと思いますが、過去の授業参観を拝見させていただいた時と比べますと、格段の差があると思います。そういう点では、先生の熱意が子供たちに伝わっているし、授業参観を各学校で見せていただきましたけれども、やはり、教室内の活気が変わってきていると思います。先生方が目標をもって何を教えたらよいかということを実践に取り組みながらやっているところは、とても効果が上がっていると思います。そういった点では素晴らしい取り組みだと感じております。

関根進委員 来年度以降もR S Tを中心に進めていくべきかなとは思っています。効果の面はもちろん、やはり皆さんおっしゃるように先生方が変わりつつあるかなとは思っています。先生方が伝えるというよりは、伝わるように一生懸命やっているように思います。また、先生方も異動がありますので、市外からいらした先生方でも同じような授業ができるようにしていただきたいと思っています。

立谷秀清市長 皆さんの意見を踏まえて、議長としてまとめたいと思います。教育長とは以前から話しているのですが、私は、R S Tは継続的に行うべきものだと思います。私も実際受験したのですが、一般の読解という意味では、よく読めば分かるんですね。さっと読んでしまうとわからない。これが読解力なんだと思います。要するに深読みをするということです。これは、日常生活でも、試験問題でもそうなんです。深読みをして相手の言わんとしていることをまず理解する、という能力が必要なのです。その能力を涵養するために、このR S Tは「気づきの道具」だと私は思っています。R S Tについて学校の先生を指導したり、専門家を呼んだりしていますけれども、私自身としては、そういう労苦をかけるよりも、とにかく、この試

験を受けさせて、気づきを作っていくことが一番大事ではないかと考えています。また、これから先を考えたとき、私は、R S Tによって成績を上げるのは2番目の目的であって、1番は子供たちの人生のためになるように考えることだと思っています。つまり、文章をしっかりと読み込むことが、人生にとってきわめて大事なことである。その一部として、試験問題を解くということにも大きな役割を果たす。という風に考えていきたい。そういった意味でR S Tによる気づきというのは非常に大きいものですから、R S Tの気づきに対して、その指導は専門家でなく学校の先生で良い。指導の一環だと思っています。もう一つ、継続するということを考えたとき、この事業の財源の多くを教育復興子育て基金に頼っています。これにも限りがある。専属職員を割り当てたり、講師を連れてきて講師に懇切丁寧な指導を受けさせる、こういったことは大変良いことなただけけれども、その分将来的に続けるための資金が削られる訳です。読解力は、今いる子供たちだけではなくて、将来の子供たちにも必要な素養なので、読解力を高め、そのうえで読書の習慣をつけてくれれば、私としては大変うれしいことだなと思っています。そのような方針で、今後も、先を見ながら、財源のことを考えて続けていきたい、という風に考えていますので、そういう方向で皆さん了解していただきたいと思います。よろしいでしょうか。

(異議なしの声)

立谷秀清市長 それでは協議事項(1)についての協議を終わります。

(2) 相馬市史編さん事業について

●協議結果

従来の計画通り事業を進め、令和6年度をもって市史編さん事業を終了する。以後は、生涯学習課文化係の所掌事務として、相馬市史のPRや継続的な資料収集を行っていく。

●協議内容

高橋利宗生涯学習部長 (別紙資料により説明)

立谷秀清市長 計画通りやってきたということですね。我々の義務として、資料があるうちに、相馬市がこのようにして生き延びてきたという歴史の証左は残していかなければならないですね。1611年の慶長津波で相馬で多数の死者が出たことなど、市民がある程度知っておかなければならない事柄もある。今後は、現在の計画の通りに進めて、我々の歴史に対しての責任を果たすことになります。従来通りの計画で進めるということによろしいでしょうか。

(異議なしの声)

立谷秀清市長 それでは協議事項(2)についての協議を終わります。

(3) その他

立谷秀清市長 その他として、私から、昨日協議したことについてお話ししたいと思います。相馬フォロワーチームというNPOがあります。このNPOには臨床心理士が3人いまして、各学校に行って活動している。さらに、各学校で心の問題等を抱えている子どもを、LVMH子どもアート・メゾンに連れてきて、そこで臨床心理士がカウンセリングを行うという、とても素晴らしいことを行っています。この事業は復興財源で実施しており、財源がつく理由は、東日本大震災でショックを受けた子供たちの心のケアなんです。あの時は、学校の授業で、「海」なんて言うとみんな泣き出したりして大変だった。まさにPTSDなんですね。そういうことに対して、全国から臨床心理士を集めて、NPOを作って、羽根田理事長や長有紀枝副理事長や上昌広理事など、立派な方が入って活動してきて、私は震災の心のケアにはきわめて効果があったと思っています。あれから13年経って、現在そのようなPTSDは少なくなったと捉えていますが、現在、相馬フォロワーチームの事務所の相談室で個別にカウンセリングを受けている子どもや保護者が年間三百人以上います。このカウンセリングは、要するに日常生活での心のケアなんですね。ですから、今相馬にフォロワーチームがあるということは、相馬の教育の上で極めて有効に働いているんですよ。一般的な意味で。例えば、これを担任がやるとしたら、担任がパンクします。先生方にとっては極めて良い教育のツールとなっているんです。復興の財源でいつまでできるかという問題があるんですね。5年は延長したけれども、ここから先どうかと。震災後、日本香堂が「笑点」の地方公演で得られた利益を合計7,000万円ほど寄付してくれた。その他にも集まって、合計1億円ほどある。それはまだ手を付けずに残している。私の考えとしては、臨床心理士が相馬の教育の現場で相当有力な力になっているということは間違いない。イレギュラーな所で心の問題を抱える子供たちの面倒を見るということは、生活の面倒、家庭の問題、精神的な面倒を見ることになり、これは先生の本来の仕事ではないわけですから、これを臨床心理士の先生がやってくれるということになれば、それは相馬の教育がその分進んでいるということになる。しかし、それは復興の金に依存していて、復興財源が終了したら、1億円の基金があるにせよ、現在のペースで出していたら4年で基金が尽きてしまう。これは、これからも続けていかなくてはならない事業。臨床心理士が今3人だけでも、2人になって運用していくにはどうか、財源をできるだけうまく使っていくことを考えなくてはならない。教育委員会としてやらなくてはいけないことは、臨床心理士たちから先生が学ぶことです。いずれ臨床心理士たちの負担を軽くしていったって、学級運営のなかで、学ぶべきところも大いにあるのではないかと思います。いずれ先細りになる、ただゼロにはしたくない。今財源があるからという考えに立ってはいけなくて、長期的な計画を立てて基金をどうやって活用していくか。私としては、復興財源の終了後も支援してもらえるように、原発の問題として、原子力対策委員会で頑張ります。だけど本当は、相馬市の教育の質に関わる問題なのです。これは、市長として頑張っていきたいと思っています。

それからもう一つ、よそでやっていない事業として、エル・システムがあり

ます。文科省（文化庁）からの財源がなくなってしまいましたが、私は復興のシンボルとして、続けてもいいのかなと、だけど市民の税金からとなると、公平性の問題となりますので、共通目的として相馬市の誇りになるんだということで400万円に限り教育復興子育て基金から出そうと思っています。

フォロワーチームも、エル・システムも、RSTにしてもそうですけれども、先のことを考えて、今何をしておくべきか考えるべきですね。ということで、これは1年かけて、フォロワーチームの事業をどういう風にしていくのか、私から、来年度みんなで考えなくてはならないことをひとつお話させていただきました。

立谷秀清市長 その他なければ、これで今日の会議を終わります。

5 閉 会